

仏教と自殺問題

——焼身自殺をどう見るのか——

金剛大学校 仏教文化研究所 HK 教授

チャ 車 サン 相 ヨブ 燐

0.

現代社会において自殺（suicide）問題が深刻になっていることをうけて、仏教の観点からの自殺に関する研究も増加している¹⁾。その一方で、自殺の一形態ながら、最もひどい苦痛の死である焼身自殺（self-immolation）についての仏教的立場を考察した国内の研究はそれほど多くない²⁾。

現代史の中で仏教僧侶によって焼身自殺が行われた事件は広く知られている。代表的な事例では 1963 年、ベトナムのティック・クアン・ドック（Thich Quang Duc、釈広徳）僧侶の焼身自殺が言及されている。また、1998 年以後、チベットで 130 人の僧侶と仏子の焼身自殺が現在まで連続的に続いている³⁾。韓国でも 1998 年に南北平和統一・衆生済度・仏教発展を祈ってチュンダム（冲湛）僧が⁴⁾、また、2010 年にムンス（文殊）僧という比丘僧が焼身自殺をした⁵⁾。

これら僧侶の焼身自殺に対する評価は概して二分している。一方では不殺生戒の仏教倫理に背く事だと批判され、もう一方では崇高な大乘菩薩行である「焼身供養」だと賛嘆されたりもする。概して、犠牲的な死を選んだ人々に対して仏教戒律に合っていないと非難するのは容易ではないため、批判よりは英雄的賛嘆が現実的により多く見られる⁶⁾。

また「焼身供養」という宗教的な意義でのみ、この死を評価するには、彼らの焼身自殺行為の背景と動機に政治的な問題が非常に深く絡み合っているのである。

ベトナムでは独裁政治、戦争、宗教差別弾圧といった状況で僧侶の焼身自殺が選択されたし、チベット僧侶も「中国統治反対！ チベット自由！ ダライラマ帰還！」を叫びながら焼身自殺した。韓国の文殊僧もやはり遺書によると、李明博政権の四大江環境破壊事業の中止、不正腐敗、経済的両極化の問題解決などを求めている。

このように現代史で僧侶の焼身自殺問題は、一般の自殺問題と異なる差別性を持つ。それにもかかわらず、この特殊な問題に関する真剣で細密な学問的省察はあまり行われていない。僧侶の焼身自殺を一般自殺論の延長としてのみ扱ったり、または政治社会的な関係によって過度に美化する評価のみが紹介されていることなどが問題点として指摘できる。その結果、現代人は僧侶の焼身自殺に対して非常に曖昧模糊な態度を持っているといえる。

これまでなされてきた仏教と焼身自殺に対する評価に対し、次のような疑問があげられる。

まず、仏教は自殺批判主義者のように、どんな条件でも絶対的に生命を優先視する思想だといえるのか、あるいは焼身供養の賛嘆者の主張と同様、僧侶の焼身自殺がすべて大乘仏教の菩薩道の極として評価されても良いのか。このような両極の見解に対する中途的解釈が要求される時期なのである。

一方、本研究では原論的な立場や概念的 analysis の代わりに、新しい問題を提起する。すなわち、「どうして僧侶らは、よりによって『焼身』を選んだのか」という点である。他の方法の死でも自殺問題においては同じ内容が適用できるだろうが、中でも特別に「焼身」が選ばれた背景を照射することにより、焼身自殺と仏教問題の解決の糸口を捜すことができないだろうか考える。

1.

一次的に焼身供養が言及されている仏教テキストを検討した。

まず最初に『シャシャ・ジャータカ (Śaśajātaka)』と『ヴィヤーグフリー・ジャータカ (Vyāghrījātaka)』では、飢えた婆羅門を救うため、自ら火に焼かれて肉を供養した兎の話、飢えた雌虎に自分の体を布施することなどが釈迦牟尼ブッタの前生の説話として紹介されている⁷⁾。このような『ジャータカ』で説く捨身と関連した内容は焼身自殺と直接的に関連があるとはいえない。しかし、『ジャータカ』の捨身と関連した内容は菩薩行という観点から、他人のため、あるいは求道のために自分の体をかえりみず、喜んで犠牲になるという英雄的なストーリーがその主要内容として紹介されている。直接的ではないとしても、このような『ジャータカ』に紹介されている、自分の体をかえりみずに菩薩行を実践する英雄主義的なフィクション (fiction) としてのストーリー (story) が「焼身」という実質的な行為にある程度の影響を及ぼしたと推定できるであろう。『ジャータカ』の書信関連の内容は釈迦牟尼ブッタが前生で実践した菩薩行と関連する利他、あるいは求道の側面を強調するためのものであり、「捨身」を積極的に実践しろというメッセージが盛られたものではないにもかかわらずである。釈迦牟尼ブッタの前生の説話も少なくない影響を及ぼしたと推定されるが、より直接的な教説は大乘經典類で見つけることができる。代表的な經典は有名な『妙法法華經』である。体や腕、指などを焼くことが仏様に捧げる最高の供養と説明されていて、「藥王菩薩本事品」の意見菩薩は捨身 (*ātma[bhāva]parityāga/ svadehparityāga*)⁸⁾ 供養を実践する姿を見せた。

この供養を終えて三昧から起きて、『私がたとえ神通力で仏様に供養しても、体として供養することしかできない』と自ら思った。すぐ、栴檀・薰陸・兜樓婆・畢力迦・沈水・膠香というさまざまな香を飲んだ。また、瞻蔔と多くの花から絞った香油を飲み、千二百年⁹⁾ 過ぎた後に、香油を体に塗って、日月淨明德仏の前に進み、空の宝衣で自らの体を覆って、香油を注いだ。神通力に基づいた誓願で自らの体に自分で火をつけたら、その光明はあまねく八十億恒河沙の世界を照らした。あらゆる仏様がこれを見て同時に賛嘆し、『良いかな良いかな。善男子よ、これこそ本当の精進、これこそ本当の如来に差し上げる法供養だ。もし、花と香と栄楽と焼香・末香・塗香、天繒、幡蓋・海彼岸檀香などのもの、このような様々な物で供養しても、十分に及ばず、たとえ、王国や妻子を布施しても、また、及ばない。善男子よ、これを指して最高の布施だとし、あらゆる布施の中で断然、最も尊いものであり、最も特勝なものである。何故ならば、すべての如来を法で供養する理由であるからだ』とおっしゃられた¹⁰⁾。

大乘仏典文学の白眉と評価されている『法華經』では、捨身あるいは肉身供養こそ、仏様にささげる本当の布施、法供養 (dharma-pūjā) として紹介されている。しかし「三昧」あるいは「神通力」と結びついた捨身と関連する象徴主義的表現は、前で言及した『ジャータカ』と同様に、捨身を勧奨するためではなく、法の尊さを現わすための修辭学的表現といえる¹¹⁾。

二つ目は『梵網經』である。406 年、鳩摩羅什と一群の門下生たちが『梵網經』を翻訳した直後にこの經に根拠し、大々的に菩薩戒の戒を受けたが、この經では「諸仏に体・腕・指を燃やさなければ、出家した菩薩ではない」¹²⁾ と言うくらい、菩薩の徳目として規定されるに至る。『梵網經』は、東アジアの大乘仏教圏での菩薩戒の受戒の際に、その思想が儀礼的に再現されるという点で、影響力が非常に大きいことが分かる。韓国仏教の場合、受戒式で焼身を象徴して「燃臂」を必ず行う。もちろん、腕を焼くのではなく、香の火で腕の肌をさっと焼くことで、その代わりとするが、その思想は『梵網經』の教説に依拠していることがわかる。

最後に『大般涅槃經』もやはり「現世の肉身で灯台と芯紙を作って火を灯す焼身」に言及している¹³⁾。

ところで、ここで興味深い点は、焼身供養を説くこの三つの經典がすべて鳩摩羅什と関連しているという点である。『妙法蓮華經』と『梵網經』は、鳩摩羅什が直接翻訳した經典であり、最後の『涅槃經』は、ヘオムが翻訳した『藍本涅槃經』だが、彼もやはり鳩摩羅什の門下弟子であった。体を捨て、他人の生命を救うとか、法を求める教説は多くの經典でも登場するモチーフだが、特に、体を焼く焼身供養が強調されたこの經典類は、鳩摩羅什となんらかの関連を持っていると推定してみることができる。

2.

次の分析では、歴史的な焼身供養の事例とこれに対する評価の内容を検討してみることにする。焼身供養の事例を紹介した文献は中国の場合、『弘贊法華伝』と『景德伝燈録』、そして『高僧伝』と『続高僧伝』などである。特に『高僧伝』と『続高僧伝』はそれぞれ「亡身」と「遺身」という別途の項目を設定しているくらい、多くの焼身供養者を記録している¹⁴⁾。

『高僧伝』の「亡身」で言及されている焼身関連の人物は計七人である¹⁵⁾。

- ① 釈法羽は普段、頭陀行を实践、薬王菩薩の焼身供養の教訓を仰いで模範とすることを念願していて、「捨身品」を唱えながら焼身供養した。
- ② 釈慧紹は苦行を实践、薬王本事品を唱えながら焼身供養した。
- ③ 釈僧瑜は薬王菩薩の足跡を追って「薬王品（＝薬王本事品）」を唱えながら焼身供養した。
- ④ 釈慧益は普段、苦行精進、「薬王品（＝薬王本事品）」を唱えながら焼身供養した。
- ⑤ 釈僧慶は梵行を磨き、自分が造成した維摩居士の像の前で焼身供養した。
- ⑥ 釈法光は苦行頭陀を实践、何かの経を唱えたという言及はないが、焼身供養する時、読誦したと記録。
- ⑦ 釈曇弘は幼い時から戒行を磨き、律に専念し、『無量寿経』及び『観経（＝観無量寿経）』を普段から読誦して浄土に生まれるのを希求。焼身供養。

これらの類型を分析すれば、①～④は『法華経』の「薬王本事品」に基づいて焼身供養を实践した人物だという点に分かる。①～⑦は共通的に戒行や苦行、頭陀行と密接に連結していることが分かる。これら僧侶は苦行と頭陀行の究極として焼身供養を選択した可能性が高い。このような評価は焼身供養が説かれた『梵網経』との関係からある程度、類推してみることができであろう。釈曇弘の場合は焼身供養と往生が結びついた形態という点で特異だといえる。

『高僧伝』を編纂した慧皎の場合は、焼身供養が不殺生戒に抵触するとみていたが¹⁶⁾、焼身供養の正当性を確保するため、二つの条件を提示した点が注目される。まず、焼身供養の実践者の資質としては「階位が高い権現菩薩、四忍を証得し、毀犯禁戒の罪を越えた菩薩」を提示していて、行為自体の条件をあげ、「衆生のために適切な時期に行うことにより、あらゆる方面で多くの利益を実現すること」を提示した¹⁷⁾。慧皎は焼身をはじめ、亡身の利得と過失を厳密に区別している。このような区別を試みた理由は、求道や利他行ではない一般の人たちが勝手に行なう無分別な亡身の試みに対する心配が優先視されたためであろう。同時に、このような亡身の試みが戒律に背くという観点も影響したのである。

『続高僧伝』の「遺身篇」で言及された焼身供養は計三人である¹⁸⁾。

- ① 釈法凝は指から始め、全身を焼身供養、何かの経に根拠したという内容は見られない。
- ② 釈僧崖は焼指と焼身を实践、『法華経』を言及¹⁹⁾。
- ③ 釈会通は『法華経』の「薬王本事品」に基づいて焼身を实践。
- ②と③の場合、『法華経』と密接な関連があることが分かる。

『続高僧伝』の道宣は、焼身供養を一般化することに反対した。個別的な事例として、世俗的な利益と名誉を得るために焼身供養した場合があったからである。道宣は不純な動機で焼身した場合は、戒律違反だとしたが、焼身供養自体を一緒くたにして戒律違反とみなす見解は批判した。菩薩行としての焼身供養の価値を否定し、不殺生戒の戒律問題に限定してこれを解釈する態度を避けようとしたのである。

焼身供養に対する最も強い批判は、やや後代、義浄の『南海寄帰内法伝』で見られる。義浄はインドへ留学したのだが、焼身供養の問題点を仏教の原則、つまり出家者の律蔵遵守規則に依拠して批判し、また、焼身不合²⁰⁾と傍人獲罪²¹⁾に分けてこの問題を細密に分析した。しかし、そこでもやはり、徳の高い菩薩の衆生救済の利他行としての焼身供養²²⁾は例外としている。

3.

焼身供養を説いた大乘經典類とこれに対する評価の歴史を総合して見れば、現代大乘仏教圏の僧侶には二つの重

要な情報が同時に影響していることが分かる。

一つ目は不殺生の戒律で、もう一つは求道と利他の焼身供養である。また、焼身供養は不殺生と結びついて、強く批判されたとしても、一度も菩薩行としての、それ自体の価値が否定された事がなかったのである。

それならば、現代史で登場した、あるいは続く僧侶と仏子たちの焼身自殺をどう見るべきなのか。焼身自殺自体が不殺生に抵触しているため、無条件に否定するのではなく、『続高僧伝』の道宣の指摘のように、個別的な事例別にこの問題を判断しなければならないであろう。そして、『高僧伝』の慧皎の説明によって、実践者が気安く焼身できる修行の境地、あるいは純粋な動機なのかどうかの可否を問い詰めるべきだし、そして、その行動によって多くの人の利益になったのか、問うことが必要である。

最後に、焼身供養が東アジアの仏教僧侶に求道的志向の原型として影響していること自体について検討される必要があるようである。特に、現代社会での僧侶の焼身自殺は政治的には肯定的な面がなくはなかったが、その行為の結果として、必ず連鎖的な焼身を誘発してきた点を考えてみる時、なおさらそうである。

ブッダはこのようなおっしゃった。

比丘たちよ、自分自身を投げ捨ててはいけない (na bhikkhave attānaṃ pātetabbaṃ, Vin. III.82)²³⁾。

参考文献

『韓仏全』：『韓国仏教全書』

『大正』：『大正新脩大藏經』

ノ・ソンファン No, Sung-hwan 2000、「日本 焼身自殺に関する研究」、『日本文化研究』、Vol.2、pp. 271-292

パク・ギョンジュン Park, Kyoung-joon 2010、「文殊僧の焼身供養の意味と評価」、『仏教学報』、Vol. 56、pp. 273-294

パク・グムピョ Park, Kyum-pyo 2011、「ベトナム近代化に及ぼした仏教の影響——ベトナム戦争と仏教徒抗争を中心に——」『韓国禅学』、Vol. 26、pp. 555-599

李箕永 Lee, Ki-young 1964、「捨身 (Atmabhava-parityaga) に関して」、『東国史学』、Vol. 7、pp. 107-118

車次錫 Cha, Cha-seok 2007、「法華経焼身供養の問題点とその象徴性」、『仏教学研究』、Vol. 16、pp. 213-238

Benn, James A. 2007, *Burning for the Buddha: Self-Immolation in Chinese Buddhism*, Honolulu: University of Hawaii Press.

Harvey, Peter 著、ホ・ナムギョル Heo, Nam-kyol 訳 2010、『仏教倫理学入門』、ソウル：図書出版 CIR

池麗梅 Chi, Li-mei 2013、「宗教実践としての『焼身』は戒律に違反するのか？——『続高僧伝』『僧崖伝』の成立から窺える中国における仏教収容の一断面——」、『法華天台思想の東アジア的展開発表資料集』、論山：金剛大学仏教文化研究所、pp. 75-131

船山徹 Funayama, Toru 2002、「捨身の思想——六朝仏教史の一断面」、『東方学報』、Vol.74、pp. 311-358

伊藤千賀子 Ito, Chikako 1994、「本生における分類と比較について——試論としての捨身施の基本構造」、『印度学仏教学研究』、Vol. 43 No. 1、pp. 205-209

四

Harvey, Peter 2000, *An Introduction to Buddhist Ethics: Foundations, Values and Issues*, Cambridge: Cambridge University Press.

Kovan, Martin 2013, "Thresholds of Transcendence: Buddhist Self-Immolation and mahāyānist Absolute Altruism, Part One", *Journal of Buddhist Ethics*, Vol. 20, pp. 775-812.

_____ 2014, "Thresholds of Transcendence: Buddhist Self-Immolation and mahāyānist Absolute Altruism, Part Two", *Journal of Buddhist Ethics*, Vol. 21, pp. 378-423.

註

- 1) Keown[1996]、Harvey[2000:286-310]、Benn[2007]。Kweonの脚注2には、仏教文献に言及された自殺と関連した既存の研究成果を紹介している。国内ではホ・ナムギョルがHarvey[2000]の本を2010年にハングルに完訳した。
- 2) 国内研究としては李箕永[1964]、車次錫[2007]、パク・ギョンジュン[2010]、パク・グムピョ[2011]がある。国外研究としては船山徹[2002]；池麗梅[2013]；Kovan[2013]；Kovan[2014]などがある。
- 3) 現在まで焼身自殺したチベット僧侶は15人（2人は尼僧）で、僧侶だったが還俗した後焼身自殺したチベット人は11人である。これについては国際チベットキャンペーンのサイト（<http://www.savetibet.org/resources/fact-sheets/self-immolations-by-tibetans/>）を参照。
- 4) 冲湛僧は政治的な理由ではなく、宗教的な目的で焼身供養を実践したという点で、脚注5に言及される一如僧と一脈、相通ずる点がある。
- 5) 覺岸（1820-1896）が書いた『東師列伝』の「一如禅伯傳」（『韓仏全』10巻。1055c6-1056b11）では、朝鮮後期の一如（1807-1832）が試みた焼身供養を言及している。彼が焼身供養を実践しようとした理由は地・水・火・風の四大から成る肉身を捨て、極楽世界に往生するためだと紹介されている。これについての原文は『韓仏全』10巻、1056a10-11、「四大各離如夢中、爾不識此倡乎。吾欲往生極樂耳」を参照。
- 6) 焼身自殺に対する国内の研究成果を整理すれば、次のようである。李箕永[1964]はティック・クアン・ドック（Thich Quang Duc）僧の「焼身」を仏教的観点でどう見るべきなのかについて、国内で最初に照明を当てた。彼は『高僧伝』、『続高僧伝』、『宋高僧伝』の「焼身」「捨身」「亡身」「遺身」の項目で言及された「焼身」と関連する高僧の事績を言及した後、「焼身供養」の起源と関連した大乘文献として『法華経』と『金光明経』、『梵網経』また、『大丈夫論』を列挙している。そして、新羅僧・義寂の『菩薩戒本疏（『大正』1814）』と法蔵の『梵網経菩薩戒本疏（『大正』1813）』に現われた「焼身」についても幅広く扱っている。最終的に彼は菩薩行と連携される「焼身」を自殺と規定することはできないと述べた。これに反して、車次錫[2007]は『法華経』『薬王菩薩本事品』では、実在的な焼身供養を重視するより、焼身供養が持っている象徴性を強調しているという点を論議している。そして、実際に身を焼くことは、戒律と抵触するという点を強調している。パク・ギョンジュン[2010]はムンス（文殊）僧の焼身供養追慕学術セミナーで、彼の焼身供養を大慈大悲の菩薩行と評価している。パク・キムピョ[2011]はティック・クアン・ドック僧が仏教迫害、独裁、戦争というベトナム政権の繰り返しの弾圧に対し、僧侶として実践できる最後の行為として焼身を選択したという点でティック・クアン・ドック僧の焼身供養を自殺と規定できないと評価している。
- 7) 伊藤千賀子[1994]。
- 8) 李箕永[1964:111-114]はサンスクリット本と鳩摩羅什訳『法華経』の捨身関連の文を対照し、捨身の原義を紹介している。船山徹[2002]は漢訳の捨身、身供養と関連し、サンスクリット語及び経典の典拠を紹介すると同時に原義的捨身、象徴的捨身、死と同意語としての捨身、瞑想法としての捨身など、四つの側面から捨身の意味を精密に分類している。
- 9) 李箕永[1964:113]と船山徹[2002:355]はサンスクリット本『法華経』で千二百年ではなく、十二年と言及していることを明らかにしている。李箕永は十二年という数字以外にもサンスクリット本と訳本『法華経』の内容上の違いを言及している。
- 10) 『大正』262.53b4-16、「作是供養已、從三昧起、而自念言、我雖以神力供養於佛、不如以身供養、即服諸香栴檀薰陸兜婆婁畢力迦沈水膠香、又飲瞻蔔諸華香油、滿千二百歳已、香油塗身、於日月淨明德佛前、以天寶衣、而自纏身、灌諸香油、以神通力願、而自燃身、光明遍照八十億恒河沙世界、其中諸佛同時讚言、善哉善哉、善男子、是真精進、是真法供養如來、若以華香瓔珞燒香末香塗香天繒幡蓋及海此岸栴檀之香、如是等種種諸物供養、所不能及、假使國城妻子布施亦所不及、善男子、是真第一之施、於諸施中最尊最上、以法供養諸如來故」。李箕永[1964:111-114]、船山徹[2002:356]、車次錫[2007:213]を参照。

- 11) 船山徹 [2002 : 355]、車次錫 [2007 : 223-230]。
- 12) 『大正』 1484.1006a19-20、「若不焼身臂指供養諸佛非出家菩薩」。『梵網經』関連の文については李箕永 [1964 : 117-118] と船山徹 [2002 : 345-344] もやはり言及している。
- 13) 『大正』 375.803c7-23.
- 14) 李箕永 [1964:107-111]、船山徹 [2002 : 352-351]。
- 15) 『大正』 2059.404c11-28.
- 16) 『大正』 2059.406a17-22、「然聖教不同開遮亦異……考而為談有得有失得在忘身失在違戒」。
- 17) 『大正』 2059.405c29-406b11.
- 18) 『大正』 2060.678a15-680c10 及び 683c18-684b3.
- 19) 僧崖についてのより詳しい研究では池麗梅 [2013] を参照。池麗梅 [2013 : 104-105] は道宣が「焼身」と関連した『高僧伝』の編者である慧皎の立場に同調すると共に六朝時代以後の「形盡神不滅」という身体論に立脚していることを論議している。
- 20) 『大正』 2125.231a28-b28.
- 21) 『大正』 2125.231b29-c16.
- 22) 『大正』 2125.231b27-28.
- 23) Harvey [2000:290]、ホ・ナムギョル [2010 : 528-529]。